

22 あの人こそばで死にたい

特別養護老人ホームの静養室は特別に温かい看護が満ちていて、回復して元の部屋に帰る人が多くても、死の待合室という印象は否定できません。静養室の島津さんが思いつめたまなざしで、「あの人世話で死にたかった」と言うのです。死を確実に予想し、声はかすれて。

あの人とは二カ月前に自宅復帰の出来た日野さんです。日野さんは世話好きで、特に体の不自由な島津さんには朝昼夕の三度のお茶注ぎを欠かしたことはありません。日野さんが退所するまでの二年間、それが島津さんの唯一の支えだったのです。

日野さんがいなくなると、すっかり力尽きたように寝込んでしまいました。日野さんにとっては茶飲み友だち、しかし、島津さんにはもっと深いものだったのです。

死の床にあって、いや、いまわの際と知るが故に、ひそやかな想いが瞬時に燃え立ち、「ああ、あの人をそばにいてくれたら」と切なく訴えたのです。帰らぬ旅に独りつく時、信薄ければ、愛の想いこそ最後の支えです。淡い異性間の心の通いも、今恐れる何者もなく、愛の表白となって己が胸を駆け巡る。

叶わぬ愛と知りつつ、ひとり愛に生きんとこの想いを抱いたまま、数日後の島津さんの昇天はもの静かでした。

文豪ゲーテの『ファウスト』で、善悪あらゆる経験をなめ尽くしたファウストが死ぬ時、悩みながらも努力してやまなかった高貴なる人間の魂として、天国の合唱団が彼を迎えて、「永遠に女性なるもの我らを引き寄せるなり」と歌います。かつての恋人、そして罪人だったグレーチヘンは、今は天上の愛に満ちた永遠の女性となって彼を天国に導くのです。彼こそはグレーチヘンの純愛を見捨て、彼女に重罪を犯させ獄死させていたのに。

この二人の深遠な愛と救いに比ぶべくもないが、死を前にする時、男性の胸に去来するもの、それは「永遠に女性なるもの」への思慕であると思われるな

りません。

ある日の静養室。今しがた、一人の婦人のお見舞いを受けたAさんは、彼女の握手してくれた我が掌を、幾度も頬ほに当てて独り和んでいます。「はにかみて、おもて赤らめ」とまでもいかない高年同士の想い合いは、普通、かく性愛未分化のままのほかなさを特徴としています。

愛に憧あこがれ、愛におののく。性に焦がれ、性にたじろぐ。老人ホームの暮らしはこうした自己内の葛藤かつどうをひそやかに、そして、数多くはらんでいます。

四人部屋は間仕切りカーテンで仕切られるが、昼仕切る人はまれです。体の不自由なTさんの部屋はよく昼カーテンが引かれ、仲の良い婦人とひそひそと話をしています。話以外のこともあるでしょう。

Tさんの床ずれ予防のために特殊なエアマット（常に自動的に微動）の使用を始めましたが、意外にも中止してくれと言います。「柔らこうておなごにもまれているうでたまらん」。表情をゆがめての説明でした。

それから二年、不幸にもその婦人が先立ち、Tさんは絶望し氣力を失います。

「老いていまま思ひ残りはなけれども生きたくもなし死にたくもなし」と詠んでいます。しかし、ホームでは特別、去る者は日々にうとしか、それからしばらくしてのエアマットの使用に、Tさんは何の違和感もないようです。

老いの日の性愛二つが未分化にとどまるもの、どちらかの一方に強く傾くもの、そして、かそけく消えゆくもの、一瞬燃え立つ如（ごと）きもの、十人十色の相を呈しつつも、朝露のようににはかないことに変わりありません。